

ボランティア体験記⑬

～ボランティアを通して気づいたこと～

ボランティアをしていて気付いたことは、「自尊心」まで認知症などの病気で失われることはない、ということでした。特に、男性の方に、その傾向が強いと思います。

軽度の認知症の方で、脳梗塞などで体が不自由な方がいらっしゃいました。

麻痺が強く、ひとりで「道具」などを取りに行くこともできない状態ですが極力、ご自分でなさろうとします。

たとえば、半紙を変えた方がよいなという場合でも、なんとか自分でやろうとする、最低限でほっておいてほしい、という気持ちの表れですので、洋服が汚れようと手が汚れようとあえて最低限の用意だけしておくようにしておきました。しかし、見守りは遠くでかかさないようにしておく、というスタイルです。

そういう方は、どうなるのかというと

書きたいだけ自分の納得がいくまでなさると席を立ってどこかへ行ってしまわれます。そしてそのことも忘れてしまわれているようです。

そういう方は、病気になるまで「大黒柱」として家族を支えていらっしゃった方なのではないかとおもいます。

「頼りがいのある父親・夫」として頑張られてこられ、おそらく自分が家族を支えたり妻の看病をすることはあっても自分が先に倒れて「お世話になる」ことは想定外ではなかったでしょうか。

私はそういう方々を通じて「自尊心」というもの。

「人間の尊厳」というものは最後まで人というものは失うことはない、ということ学びました。

誰だって、人の世話、迷惑をかけたくない」と少なからず思っているはずですが。

考えてみれば当たり前のことですが、いざ病人を前にするとどうしても「手伝わなければ」と思ってしまいます。しかし、本人は「病人扱い」が時には負担になり嫌なのです。

そういうときは、離れてしかしきちんと見守ることが大事ではないかと思えます。

また体に麻痺があったりする場合でも、自分で自分の事はしたい、という気持ちもどこかにあり時にそれが強く出ることもあるかと思えます。

そんなときに、役立つ本をみつけましたので、この場を借りて、ご紹介します。

居宅に勤めておられる方で、特に「裁縫が得意な方」には役に立つのではないのでしょうか

「からだにやさしい手作り服」(栗田佐穂子著・・NHK 出版)

*資料としてPDFファイルに表紙を載せています。

本文には以下の商品が紹介されています。

- *着替えを嫌がるお年寄りなどに、頭からすっぽりかぶれる、ショールを使ったリメイクのポンチョ
- *ひとりでネクタイが締めれる工夫、背広の工夫
- *片手で着脱できるズボン
- *セーターを使った帽子・ネックウォーマー
- *敷毛布をリメイクしてつくったポンチョと巻きスカート風ひざかけ

このような、簡単に自宅にあるものを使ってあると、便利なものを分かりやすく紹介しています。

例えば、着替えを嫌がる女性の認知症のお年寄りにご自分の昔お気に入りだったストールでつくったポンチョを、パジャマの上から着せてあげる。

そうすることで、着替えをしたことにもなりますし、おしゃれなものだと見た目もよいのではないのでしょうか。

また、お気に入りの昔のセーターのリメイクものも喜ばれると思います。

どれも「自尊心」を極力失わない工夫でもあると思いご紹介いたしました。

お役にたてば、幸いに思います。